

『内外教育』2010年9月24日号に陰山英男立命館大学教授が「フィンランドを視察して」という記事を寄せている。その見出しが、「国支給の教材が支える世界一の学力」となっていて、読者に誤解を与えるものとなっている。

この記事は、「外国の教育を視察すると、他の人の視察報告とはまったく違う事実を直視戸惑うことがあり、実際に自分の目で見ないといけない」と思わせぶりの書き出しで始まる。記事は、次のように展開する。

「それから授業を見せてもらいました。野の草花を素材とした授業です。……その時使われていたプリントがよくできていたので、それを作るのには時間がかかったでしょうと言うと、『いや、これは国から支給されたものを、コピーしたものだ』と説明します。つまり、野の草花を素材に多元的に授業していくことは、もともと決められていることなのです。……国がつくっていたのです。」

この書き方では、たった1つの学校のたった1つの授業を見ただけのようだが、彼は大胆にも次のような結論を下す。

「フィンランドの教育では現場に裁量権が委ねられ、学校では独自に総合学習のような授業が行われているといわれますが、どうもそういうものでもないようです。」

それなら、「他の人の視察報告」はどうなるのか。陰山氏は、「日本では、こうした授業は、教師が独自につくらなければいけないので、現場に裁量権があるというように誤解されたのでしょうか」と言いかけている。彼には、自分の見た事実は例外かもしれないと反省する思考回路はないようである。

日本人の場合、教育内容と教育方法に関して国の統制が強いので、この記事のように「国支給の教材」と聞かされると全国一律に同じ教材を使って、同じ授業をしているのかと錯覚してしまう。だが、フィンランドのある校長が「これは国から支給されたもの」と言ったのは、無料で配布されてきたという意味である。おそらく、国家教育委員会から教材例として資料集が配布されたのであろう。

さらに、この校長は、「コピーしたものだ」と言っているわけで、これこそまさに「現場の裁量権」である。

この記事には、「他のクラスでも使っているだろうか」「他の学校でも使っているだろうか」「国中で使っているだろうか」と調べたとは書かれていないし、校長に「これを使うことは義務か」とたずねたふしもない。陰山氏こそ、「誤解されたのでしょうか」。

ただ、この記事には、「授業では、最低でも先生は2人以上ついて、落ちこぼれがないようになっています」と、善意の誤解も書いてある。

また、陰山氏は「日本は、教師の指導こそ重要と言い、免許の更新制をはじめ、子供と触れ合う時間がないほど研修や業務が増えました。教師が重要、それはそれで間違いありませんが、教材など他に重要なことはいくらかもあります」とも言っていて、多忙に追い込む国のやり方を問題にしているのだが、だから教材まで国がつくって支給せよというのは本末転倒だろう。「こうした授業は、教師が独自につくらなければいけないので」、フィンランドのように教材づくりの時間、子どもと係わる時間を保障せよと言うべきであろう。そう言えない彼の教育哲学が透けて見える記事だった。